

佳作

君の挑戦は今

青森明の星中学校

3年 若松 紗那

「生きているうちに善き人たれ。」これは、およそ 2000 年前に書かれた著作『自省録』の中の一節である。私の中の大きなチャレンジは、この 1 冊から始まろうとしている。私は学校へ通う際、1 時間ほどバスに乗るので車内でよく本を読んでいる。元から読書は好きな方なので、家の本棚はどんどん埋まっていった。しかし、私は物語を読むことがあまりない。というのも、小学校生活後半から私が読むものは専ら哲学系の本ばかりなのだ。ひと昔前から哲学に傾倒し、「本」と言われば物語ではなく哲学書が頭の中に思い浮かぶほどだ。教室でクラスメートが私を見て「よく読めるね」と何ともいえない目で見られたりすることも多くあったものだ。私は考えることが好きだ。理由は、暇だったからだ。人間は暇になると一見どうでも良さそうなことを考え始める。哲学は、その発展だ。終わらない問題にうなるのが面白く、どんどんのめり込んでいった。こうしているともちろん分からぬ本も多々あり、読了はできるが感想は「難しかったな」で終わることもあった。だが、楽しいのだ。幼いときのちょっとした癖が私の未来を変えることになるとは想像もつかず、興味のある本をただ読みあさっていただけだった。

私が自省録を読んだのは小学校 6 年生の時。出会ったきっかけも正直特になく、ただ面白そうだったからである。本作はとても有名なため、一度は読んでおくべきだと思ったのだろうか。ありがたいことに今までと違ってさほど難しくはなく、簡単に読むことができた。だが、今までと本当に違ったのは、その読了感だった。面白い。信じられない感動があったのだった。

著者のマルクス・アウレリウスは西暦 121 年に生まれた古代ローマの皇帝。国家のトップとして生きる彼は、想像を絶する困難に次々と直面する。家族や仲間の死、戦争や災害。重責に押し潰されそうになる中、彼が自分自身を戒めるように紡いだ言葉。これが後の自省録となる。日記形式の書物で、「困難との向き合い方」「人生をどう生きるか」など現代にも通ずるテーマにあふれている。作中で何度も「君」と呼びかける文があるが、君とは彼自身のこと。それでも私たち現代人にも響く言葉は数多くある。2000 年を超えてなお読み継がれる理由が分かる気がする。そして、この一節である。

「あたかも 1 万年も生きるかのように行動するな。不可避のものが君の上にかかる。生きているうちに、許されている間に、善き人たれ。」

このままの生活ではだめだ。明日死ぬかもしれないのだから、もっと人生を大切に、より善くしなさい。そう言われているような気がしたのだ。

私のチャレンジ、それは将来の夢を決めてその道を突っ走ることだ。アウレリウスは哲学に情熱を注ぎ、哲学者を夢見たが貴族という立場上許されていなかった。だが、そんな状況でも彼は筆を執り、たくさんの人々の写本によって私たちまで届けられた。そう考えると、何だか不思議な感覚である。私は哲学に出会って人生が豊かになったと思う。理由は「楽しいっ」という単純なものだった。答えの出ない問いに延々と立ち向かうのは狂気の沙汰だ。そんなこと、皆分かっている。それでも私が考えることをやめないのは、無謀な挑戦でも信じられるからだ。君は良いと思うことをやれば良い。興味のあることを自分なりに突き詰めて考えろ、そして答えを導き出せ。こんな自分ながら、希望を託されたような気分だ。もしかしたら私はこのために生まれてきたのではないかとも思ってしまう。だがそれは、今この時を楽しめている証拠だ。私にとってはこの人生そのものが大きな、大きすぎるチャレンジなのだ。

アウレリウスはこんな言葉も残している。「遠からず君はあらゆるものを忘れ、遠からずあらゆるものは君を忘れてしまうだろう。」それなら、チャレンジすべき時は今だ。